

「やぶにらみ郷土史」

杉 本 彰

土佐ではいつのころか中央で成功し、活躍するのが青年達の夢となったようである。坂本龍馬がその一番手であろうか。

高知大学の前身である旧制高知高校も中央で活躍する人材の養成機関として多くの立派な人材を輩出してきた。

土佐中出身の元三菱電機の社長のご尽力により同社の工場が誘致されたり、南国市出身のカシオ電気会長により同社の南国工場ができたりして、地域づくりに大いに貢献されているのはまことに有り難いことである。

また、県内においても創造的な仕事をして華々しく成功し、県外はもとより世界に打って出ている企業もある。たくさんある中で上場している次の三社をあげよう。

1. ニッポン高度紙工業

電気絶縁用セパレーター紙の製造。昭和四十年頃、高知市旭町で岡田社長と私の高知大の同窓の市川専務のコンビで小さな抄紙機で紙を漉いていた。岡田さんは明るく研究熱心で、市川専務と春野工場と安芸工場を完成させ、今は二人とも

故人となられた。最近、鳥取県にも工場ができ、ますます発展している。

2・ 技研製作所

油圧式杭圧入引き抜き機等の製造。昭和四十年代後半、杭打ち等の業務をされていた北村社長が高知のエジソンと云われる故垣内さんとコンビで無振動、無公害の油圧式を発明をし、企業化して世界に向けて販路を広げ発展している。

3・ 兼松エンジンアリング

環境整備用特装車メーカー。強力吸引、高圧洗浄、汚泥吸引等の作業車等。故大谷社長は私と同じ会社で研究成果を企業化する際、工務部から私を支えてくれた人である。積極的で、リスクを恐れず、前へ進むタイプであった。

自分はいろいろ経験して事業を興すと常々いつていた志の高い人であった。社長になり、これからという時に亡くなられたのは真に惜しまれる。

前記の三社を起こした人々に共通しているのは、決してエリート教育を受けた人ではなく、汗にまみれ、泥にまみれて仕事をしている志の高い人達であったような気がする。

歴史的に見て、この土佐において、創造的に地域づくりに貢献した人物は野中兼山ではなかるうか。現在でも、この人物によるものと思われる構築物が数多く

残っている。

兼山は有能な行政マンとして、また技術者として營々と努力し、國造りに励んだ結果、理由はともあれ、彼の働きによって最も大きな利益を受けた藩から目を覆いたくなるような仕打ちを受けたわけである。

現在、筆山にお城に背を向けた兼山の墓が建っている。

だんだん小説めいてくるが、以来、土佐の青年達はこの地域での創造的な仕事を放棄し、広い中央で活躍する夢にとりつかれるようになったのではなからうか。

坂本龍馬以来の中央志向は旧制高知高校の存在によりますます強まったように思う。

私が関係してきた電気化学工業の分野を見ても、戦前より高知県と同様に水力による余剰電力が豊富であった他の地域では立派な企業が育っている。例えば、九州では旭化成やチッソ、北陸では電気化学、信越化学、日本カーバイド、中部ではイビデンなど一部上場企業が挙げられる。

昔は四国の八十%の電気を発電していた高知県にこのような企業が育たなかったのは地元出身の志ある技術者がいなかったからではなからうか。

最近、ようやく高知工科大が設立され自前で技術者を養成するようになった。

高知の業界も前記の上場三社の成功でこれに続こうと活気づいている感じがする。

さて、これから二十一世紀に向かって重要課題の一例をあげれば次のようなことが云われている。

1. 環境問題に関する事
2. 健康に関する事
3. エネルギーに関する事
4. 文化・芸術に関する事

その他にも、いろいろある方が一つの方向を示していると思われる。企業としてもこれらの中に多くのビジネスチャンスがあるはずである。

県外のお客を待つだけの地域社会ではあまりにもさびしい。健全な製造業を育成することは健全な地域社会をつくる上できわめて大切なことと思われる。

郷土愛にあふれた志の高い技術者を育てる難しい課題がこの高知に突きつけられている。工業品の生産額が全国最下位の汚名をできるだけ早く返上しなければならぬ。

平成元年、私が勤めていた東洋電化工業（株）が中性紙用炭酸カルシウム及び鋳鉄用脱硫剤の開発で「地場産業大賞」を受賞し、その賞金を故入交一雄社長（入交英雄現会長の兄上）のご厚意により高知化学会にご寄付頂き、「高知化学会50周年誌」が発行された。その際に投稿した文章を一部修正し、投稿させてもらった次第。